

WASEDA UNIVERSITY ALUMNI ASSOCIATION of JAPAN and TAIWAN

日台稲門会 会報 第16号



発行所：日台稲門会事務局
東京都大田区下丸子2-13-2-714(高橋方)
TEL090(6205)5454
編集委員会
発行人：岩永 康久
編集責任者：齋藤 晃

関係改善進む日台関係

台湾もTPP参加を

会長 岩永 康久



この一年を振り返ると日台関係は更に深まったと言える。東日本大震災に寄せられた台湾からの義捐金(世界中でダントツに多額の二百億円超)は日本でも大きく報じられ、大多数の日本人が親日的な台湾の存在を知るところとなっている。ところが昨年九月十一日尖閣国有化の後台湾からも抗議の漁船団が繰り出し、日本の巡視船による放水に発展するなどのもめごとが発生し、「親日」と思っていた台湾も中国と同じか?との質問を何度か受けた。以下のような背景をもとに、良く説明するところの誤解はすぐ解けた。

今年四月一日に「日台漁業取り決め」が締結された。これは尖閣諸島周辺海域の漁業権をめぐる取り決めであり、日本の排他的経済水域の一部で台湾漁船の操業を認めている。本件は交流協会(日本側)と亜東関係協会(台湾側)の間で締

結された民間取り決めとなっているが、実体としては日台政府間協定と言える。漁業協定は台湾が久しく望んでいたもので、一九九六年に交渉が開始された。以後十六回の協議がなされたが進展せず、今回十七回目でやっと合意・調印に至った。今回尖閣諸島の領有権問題については触れられていない。馬英九現総統は尖閣の領有権を主張されているが、李登輝元総統は予てより「尖閣諸島は日本に属する、但し台湾の漁業権問題は残っている」と発言されている。台湾が一番固執していたのは漁業権の問題であり、これにて日台間の最大の懸案が解決できたといえる。尖閣問題で中台の共闘を呼び掛けてきた中国はさっそく重大な懸念を表明している。尖閣問題における中台の共闘を防ぎ、寧ろ日台の関係を整密化した点で今回の日台漁業協定の持つ意味は大きい。

昨年、東日本大震災一周年追悼式において、駐日経済文化代表處羅副代表(副大使相当)が出席されたが、民間席に通され指名献花もできなかった。この件は当時の野田首相も国会答弁でその非礼を詫びられた。今年三月十一日に催された二周年追悼式典には沈代表(駐日大使相当)が出席され、外交官席に通され、指名献花も手配されていた。中国からは「台湾を外交使節団や国際機関と同列に扱うことに反対する」、「日中共同声明の原則と精神に背くものだ」との抗議がなされ、中国側は式典欠席となった。大きな犠牲

を出した大震災の追悼式であり、それを物心両面で最も支えてくれた台湾に礼を尽くして処遇するのはもっともなことであり、日本政府の対応を評価したい。

以上ちよつと硬くなりすぎたから、鉄道旅行の楽しい話をしましょう。阿里山森林鉄道に乗られた経験の持ち主は多いと思いますが、あの阿里山森林鉄道と黒部峡谷鉄道が四月二〇日に姉妹提携を締結しました。立山・黒部アルペンルートの雪の大谷を訪問する外国客の七〇%が台湾人の由。かかる連携により更に日台の往来が増えることが期待されます。日台間の往来はこの十年ほど二百万〜二百五十万人の間で推移してきましたが、昨年二の二二年には遂に三百万を達成。まさにこのような双方の友好意識の高まりによるものでしょう。

もう一つ。WBCの日台戦は手に汗握る名勝負でした。小生は国際社会に出る機会が少ない台湾が日本に勝って決勝戦に進むことを期待しました。結果は日本が勝ちましたが、負けた後の台湾チームがピッチャーマウンドで円陣を組み、全観客席にお礼のお辞儀をしている姿は感動的でした。観客席には台湾人が「日本頑張れ」の旗を持っており、一方では日本人が「台湾ありがとう」のカードを掲げている光景があちこちに見られ、シーンときて、涙がこぼれてきました。

以下8頁に続く

日台稲門会第十六期定期総会

平成二十四年六月九日(土)大隈タワーにて日台稲門会第十六期定期総会・記念講演・日台交流の集いが行われました。ちよつどの日から東京は梅雨入りとなり、かなり激しい風雨の中ではありませんでしたが、沢山の皆様にご参集頂き無事終了しました。

一. 第十六期定期総会

十五時より大隈タワー地下多目的ホールにて会員二十六名参加のもと行われ、議長は会則により岩永会長が務めました。二〇一一年度活動報告、決算報告、二〇一二年度活動方針案、二〇一二年度予算案、監査報告を行い、全て承認されました。続いて新役員・監査役の紹介、会則の変更が承認されました。会則変更の要点としては、幹事長・会計担当幹事の明文化、監査役の定義、幹事会の規定と再定義、幹事・監査役の任期の四点です。最後は、来賓として列席された、早稲田大学国際部事務部長の足立心一氏より最近の大学状況に関して説明があり十六時に閉会となりました。

二. 記念講演会

十六時より同じ地下多目的ホールにて台北駐日経済文化代表処 羅 坤燦副代表による「台湾と日本の絆」と題して記

念講演が行われました。講演には会員・会友二十九名、校友八、一般一〇、学生四十一、計八十八名参加で広いホールが満員となりました。

講演の内容としては、台湾との国交断絶した一九七二年から今日に至るまで三期に分けて、経済・文化・交通等で関係が改善してきて今は最も良好な両国の関係になっている。ここに至るまで一九九九年の台湾大震災発生時における日本の迅速な支援とそれを忘れない台湾の二〇一一年三・一一東北大震災への支援が両国の信頼関係を築きこれが、経済・文化・交通等多岐にわたり大幅な改善の原動力になり、今回、日本政府も台湾から四名の叙勲者を出すにいたしました。羅副代表の長年の日本生活を通して豊富な経験に基づく約一時間の講演の後、質疑応答を行い終了しました。(九頁に要旨掲載)

三. 日台交流の集い

十八時より場所を同じ大隈タワー西北の風に移し、交流の集いを開催しました。参加者は会員・会友三十三名、校友十一名、一般一名、学生五〇名、計九十五名。

先ず来賓挨拶は台北駐日経済文化代表処・羅坤燦副代表、交流協会・小松道彦総務部長、早稲田大学台湾校友会・陳光敏会長が行い、続いて乾杯は台北駐日経済文化代表処・李世昌文化部長がされ、交流の集いがスタートしました。

一息おいて、ゲストスピーチとして早稲田大学国際部・足立心一事務部長、台

北稲門会・山田敦会長の挨拶。新入会員紹介、早稲田台湾留学生会が三十二名参加、同じく岩永ゼミから十五名参加しておりそれぞれ代表者が挨拶を行いました。九十五名の参加者で内五〇名の学生とかつてない試みでしたが、学生達は社会人との交流を余り持ったことがなく、極めて新鮮な機会であったらしく沢山の話の輪が出来校歌を歌い散会宣言をしたにも関わらずいつまでも帰らない状況が続きました。

後日、台湾の留学生から本当に有意義な集まりであったとのメールを頂きこれに留まらず、継続していく必要性を改めて感じさせられた、日台交流の集いでした。(高橋 徹記)

総会風景は16頁をご覧ください



真摯な面持ちで講演に臨む羅副代表

祝 早稲田大学校友会日台稲門会
会報第16号 発刊

中華民國 台北駐日經濟文化代表處
代表 沈 斯 淳

東京都港区白金台5-20-2
電話 03(3280)7811

記念講演
日本と台湾の絆
特別なパートナー関係

台北駐日経済文化代表処
副代表 羅坤燦

日台稲門会の岩永会長並びにご出席の皆様、本日の記念講演会に講師としてお招き頂きましたこと、誠に光栄でございます。時間が経つのは早いもので、二〇〇七年一月に私が副代表に就任してから、もう五年が経過致しました。日頃公私とも、貴会の皆様にはお世話になっており、心からお礼申し上げます。本来ならば、当代表処の沈斯淳代表が皆様にご挨拶、そして講演をさせて頂くべきかと思いますが、着任間もない為、私がピンチヒッターをさせて頂く次第です。

二〇〇八年、馬英九總統が着任し、日両国は特別なパートナー関係であると宣言しました。そして、翌年の二〇〇九年を経済、文化、観光、青少年、地方などの交流を強化する台日パートナーシップ促進年と定め、様々な交流を促進してまいりました。台日双方が四年間努力を続けた結果、断交後四〇年で最も良好な台日関係が築き上げられました。今後も引き続き台日パートナーシップに基づいて、日米と自由、民主主義、人権などの価値観を共有し、アジア地域の安定と繁栄を続けて推進していきたいと思っております。日本からも引き続き、応援・協力をお願いいたします。貴会におかれましては、常日

頃から日台の交流に協力して頂いて大変感謝しており、心からお礼申し上げます。第です。

私は元来、米留學を志していました。が、父親が日本であれば安心と勧めたので、台湾で日本語の勉強をした後に日本へ留學し、明治大学大学院の正規研究生となりました。昭和五十三年一月十三日に羽田空港に降り立ち、それからしばらく練馬の知り合いの家にお世話になりました。到着の翌朝、外を見ると辺りは一面の銀世界で、初めて見る雪には本当に感動しました。来日もない頃、日本語が下手な私に対しても日本人々は親切にしてくれました。銀座で道に迷ってしまったとき、お店の店員さんに道を訪ねたところ、自分の仕事を放って二〇のメートルほど先のところまで道案内をしてくれました。その時の店員さんの親切は今でも忘れられません。私はいま個人的な経験をお話しましたが、私のようなケースは珍しいことではありません。台日関係は、政府だけでなく、個人レベルでも非常に緊密なのです。私は日本と縁があつて、台湾で外交部に入って外交官になってからは、台湾と日本を行き来する生活を続けています。

蒋介石政権の時代、当時の日本の田中角栄首相は一九七二年に中華人民共和国と外交関係を樹立し、日本と台湾は断交しました。日中国交正常化に伴って、日本と台湾は正式国交こそなくりましたが、経済や文化面での実質外交に重点を

置き、台湾側は垂東関係協会、日本側は交流協会という民間機構を設立してそれぞれ政府の窓口の役目を果たしています。

李登輝元總統の時代には、台湾と日本の交流が更に活発になり、また司馬遼太郎の「台湾紀行」も発表されました。一九九〇年九月の台湾中部大震災(九二一震災)では、翌日十一時には当時の小淵首相が応援の意思表示を行い、四時間後にはレスキュー隊を派遣、迅速な対応に台湾の人々は心から感謝の念を抱きました。

その後、一九九九年には石原慎太郎・東京都知事が知事として初めて訪台しました。それをきっかけに知事、地方議会が続々訪台するようになり、二〇〇三年には森喜朗・元首相が首相経験者として初めて訪台しました。それを皮切りに、これまでに麻生太郎、安倍晋三、海部俊樹元首相らが次々と訪台するようになりました。また、二〇〇五年には日台双方がノービザで三カ月滞在可能となり、二〇〇七年には台湾新幹線も開業し、自動車運転免許の相互承認が可能となるなど日本と台湾の絆は更に深まってきました。

二〇〇八年に馬英九總統が就任すると、「統一せず、独立せず、武力行使せず」の原則で、台湾は中国との関係改善政策へと舵を取り、ECFA(兩岸経済協力枠組協議)を締結。それにより、日本企業が中国大陸に進出する際、台湾企業と手を組んでスムーズに中国大陸及びアジア

アの市場開発が出来るようになりました。また、台湾と日米の関係は更に発展し、友日・親米・和中の政治スタンスとなりました。さらに、政府としては国際経済の中に台湾を組み入れるべく、日本とのFTA(自由貿易協定)締結、TPP(環太平洋戦略的経済連携協定)の参加を近い将来実現させるべく努力しているところです。また、馬總統は日本との関係強化にも力を入れ、台湾駐日代表処の札幌分処開設や、台日のワーキングホリデー協定、投資協定、航空自由化協定の締結などの進展がみられました。二〇一〇年には東京羽田―台北松山便も就航し、空の足が格段に便利になりました。

最近では、二〇一一年の東日本大震災への台湾からの支援により、台日双方の好感度が高まっています。世論調査によると、台湾人の一番好きな国は日本であり、日本人の八四%が台湾に対して身近感があるという調査結果が出ています。また、今年四月に行われた天皇陛下主催・春の園遊会には、馮寄台前駐日代表が台湾代表として初めて招待され、天皇陛下から感謝のお言葉を掛けて頂きました。

このように、近年の台日関係は大変良好な状態あり、今年五月の馬英九總統の二期目の就任挨拶でも台日関係が言及されました。台日が今後更なる交流強化を進め、引き続き協力してアジアの発展に尽力していきたいと願っています。

秋季講演会
前台北特派員から見た中台関係

平成二十四年度 秋季講演会

日時：十月十三日(土) 午後四時より

講演会場：二十二号館二〇二教室

講師：野嶋剛氏(朝日新聞国際編集

部長)

演題：前台北特派員から見た中台関係

懇親会：二十二号館八一八教室にて

午後五時半より

今回は、朝日新聞の野嶋剛氏を講師にお招きし、「前台北特派員から見た中台関係」という題目でご講演を戴きました。講演には、会員・会友二十八名、一般二十七名、学生一〇名の計六十五名の方が参加されました。野嶋氏は、二〇〇七年から三年間台北特派員を務め、中華圏における政治、外交、文化などの分野で、取材・執筆を続けております。

時まさに尖閣諸島問題の真つただ中で、参加者も集中して野嶋氏の講演に耳を傾けました。この問題は、単なる日中間の問題と捉えるのではなく、日米中台関係の視点から見ざるべきである。日台の境遇は、米中の狭間におかれているという意味で類似している。共に米国の庇護にあり、島国であり、自由民主主義国であり、中国と向き合わざるを得ないという共通点がある。

馬英九政権は、和中親米友日を掲げており、中国は台湾の離れる心をどう食い

止めるかに腐心している。このような状況下で特に日本は台湾との関係に注視し、懸案となっている漁業権の問題を早期に解決し、馬英九總統の提唱する「東シナ海平和イニシアチブ」を真剣に検討すること等を持って、中国を牽制することが大事である、等のお話がありました。

その後、質疑応答に入りましたが、終演時間が近づき、途中打ち切りとなるほどの盛会となりました。

なおお忙しいなか、台北駐日経済文化代表處の羅副代表と林次長が参加され、来賓としてご挨拶をいただきました。

(担当幹事 北川原宣夫記)

・野嶋剛氏プロフィール・

一九六八年生まれ。上智大学新聞学科卒業後、朝日新聞に入社。佐賀支局、西部本社などを経て、二〇〇一年からシンガポール特派員。イラク、アフガニスタンで戦争報道を経験し、「イラク戦争従軍記」(朝日新聞社、二〇〇三年)を出版。東京本社政治部記者などを経て、二〇〇七年から二〇一〇年まで台北特派員を務める。中華圏における政治、外交、文化など幅広い分野の取材・執筆を続けており、「ふたつの故宫博物院」(新潮選書、二〇一一年)、「謎の名画・清明上河図」(勉誠出版、二〇一二年)、「銀輪の巨人GIANT」(東洋経済新報社、二〇一二年)を著す。現在、朝日新聞国際編集部次長。



真剣に耳を傾ける会員・会友



台湾のおかれた立場を分かり易く説明する野嶋氏

日本語教育と進学指導の JET

- 大学院進学コース ●大学進学コース
- 日本語コース ●短期コース

学校法人 JET 日本語学校

理事長 金 美齡 (昭和46年文研博士単位終了 元早大講師)

校長 井上靖夫 (昭和60年一文卒 早大学院講師)

東京都北区滝野川7-8-9 TEL.03-3916-2101

Email: info@jet.ac.jp Homepage: <http://jet.ac.jp/>



早稲田大学台湾校友会

二〇一二年総会参加報告

二〇一二年十一月二十四日(土)に、早稲田大学台湾校友会二〇一二年総会が台中明德女子高級中学において開催され、日台稲門会からは、岩永会長、高橋幹事長、小野間顧問(夫妻)、北村幹事(夫妻)、北川原幹事、三村幹事の総勢八名が参加しました。

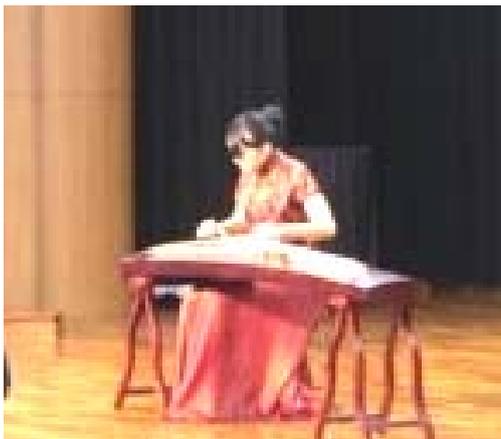
総会開催前には、明德女子高生による楽器演奏や合唱、中国古来の衣装による踊りやファッションショーなど盛りだくさんの歓迎アトラクションがありました。総会は、台中明德女子高級中学の理事長であり、二〇一二年度大会委員長である劉清標氏の開会のご挨拶で始まり、陳光敏・台湾校友会会長の挨拶、鎌田薫・早稲田大学総長等の来賓の挨拶の後、早稲田大学、福岡稲門会、熊本稲門会、遠州稲門会、及び日台稲門会など日本から駆けつけた各稲門会と早稲田大学台湾校友会との記念品交換や校友会活動報告が行われ、無事終了となりました。

総会の後、会場をI.Fの食堂に移して、会食懇談会が行なわれ、ステージ上では、各地稲門会代表の方のスピーチやカラオケ、また会場内では、校友相互の交流が図られました。

最後に、遠州稲門会の青島幹事長の口上に合わせた早稲田大学第二校歌「人生劇場」、続いて「紺碧の空」、「早稲田大学校歌」を声高らかに合唱した後、エール

を切つて総会は和やかな中、閉会となりました。

なお、総会前日の二十三日の夜には、台北稲門会主催による総会前夜祭が台北の樺慶川菜餐廳において行なわれ、日台稲門会からは、岩永会長、高橋幹事長、北川原幹事、三村幹事が出席し、楽しい時間を過ごしました。(文責・三村)



楽器演奏(楊琴)



台中明德女子高級中学



会食懇談会



鎌田薫総長



劉清標大会委員長



陳光敏台湾校友会会長



新春講演会
台湾少年工との交流で
見出したもの

平成二十四年度 新春講演会

日時：二月二日(土) 午後三時より

講演会場：二十二号館五の二教室

講師：石川公弘氏(日台稲門会前会長)

演題：台湾少年工との交流で見

出したもの

懇親会：二十二号館八一八教室にて

午後五時半より

本年の新春講演会は、日台稲門会前会長で高座日台交流の会長、日本李登輝友の会常務理事を務められる石川公弘氏が講師として、ご自身の台湾少年工との七〇年にわたる交流について語られました。今回の講演会の演題を、ふにあたっては、戦時中に台湾から日本に來られた少年工たちと、彼らと関った日本人との間に結ばれた深い絆に基づく交流が七〇年にわたって続いてきたという事実を、日本と台湾の、特に若い人々に知ってもらいたいという強い思いが当会幹事一同にありました。

そのため、当会の会員・会友を中心に、W T S A (WASEDA TAIWANESE STUDENT ASSOCIATION = 早稲田大学台湾同学会)、日台学生会議といった学生組織に声をかけて若い方々の出席と協力を募りました。また、当日配布資料の中国語への翻訳、簡単な通訳等々のサポート、当日の懇親会の司会も学生にお願いしました。日台若者交流会からも初の出席者があり、その結果、講演会では会員・

会友から三十四名、一般から十七名、学生が二十七名の計七十八名が出席されました。懇親会に至っては、学生は会費無料ということもあり、会員・会友が三十四名に対して、学生は二十七名がそのまま参加、かつてないほど若人の熱気が感じられる賑やかな会合となりました。ちなみに、懇親会の料理はケータリングを活用、低価格かつ好評なメニューとなりました。台北駐日経済文化代表処からは、赴任後間もない林世英副組長が、引き継ぎ等で多忙な中を、出席頂きました。

石川氏の講演内容は、以下のようなものでした。

昭和十七年(一九四二年)九月に神奈川県高座郡(現、同大和市、座間市)に航空機製造の高座海軍工廠が設立されることになり、その熟練労働力の不足を補うため台湾から少年工の募集が行われました。募集に際しては、航空機を製作しながら勉強すれば工業学校卒業の資格が取得でき、将来は技師への道も拓けるという破格の条件が付与されたのです。そのため、台湾の国民学校、同高等科、中学校から級長・副級長クラスの優秀な応募者が続出、激しい選抜競争の結果、総勢八千四百人の少年工が日本に渡ってきました。少年工たちは、昭和十八年五月(翌年五月まで六期に分かれて来日)しましたが、彼らは技術者への夢を抱いて、あくまで自ら志願して日本へ来たのであり、彼らに対する日本海軍の期待も大きなものがありました。その証拠に、彼らは浅間丸、鎌倉丸など当時第一級の豪華客船に乗船、海軍は日本まで護衛艦も付

けて送っています。

彼らは毎朝夕、軍歌を歌いながら工場まで行進して作業に従事、高座海軍工廠で研修した後、日本各地の先進工場に散って、雷電、紫電改、零戦、月光等の海軍新鋭機の製造を行いました。そうして、日本側の期待に応えて優れた技術集団として成長していききました。しかし、戦時下のことで次第に食糧事情も悪化、航空機製造工場は爆撃の一番の標的となり、少年工も六〇名もが亡くなっています。また、南国からきたため日本の厳しい寒さが最もこたえた様子で、しもやけ・凍傷になる者も多く、若十二歳程度の少年たちはホームシックにもなりました。

服装も学生服ではなく、作業服だったこともショックでした。こうした困難な環境の中、石川氏の父上は国民学校校長を退職して、高座海軍工廠の少年工宿舎の舎監として彼らをよく指導されていきました。石川氏ご自身も少年工からよく菓子を分けてもらい、可愛がってもらったとのことです。

敗戦によって、台湾少年工の立場は、突然に日本人から、敵国だった中国人へと大きく変わることとなりました。さらに、日本海軍自体が解体されたため、当初の約束と異なり何の資格も取得できませんでした。戦後の混乱の中、自暴自棄となる者も出たのですが、石川氏の父上のアドバイスもあり、彼ら自身の自治組織「台湾省民自治会」を結成、人格者である李雪峰会長のもと、団結して日本の関係当局と交渉を行いました。彼らの食料の確保から退職金、毎月五〇円の小遣いまで交渉で獲得しました。努力が実り、

水川丸などの帰還船も手配されて、昭和二十一年二月までに全員が整然と台湾に帰郷することができました。李登輝元總統も台湾少年工が仕立てた帰還船に神戸から乗船、一緒に帰国しています。

台湾に戻ってからは、少年工たちのさらなる苦難のはじまりでした。ご承知のように台湾は蒋介石の率いる国民党が支配する体制になっており、その後三十八年間で続く戒厳令下、白色テロの時代が長かったのです。日本軍のために航空機製造に従事したことは公には出来ず、大陸からの中国人支配下で少年工たちは沈黙を余儀なくされました。

こうした中で、高座海軍工廠の技師であった早稲田工手学校出身の早川金次氏が、昭和三十八年、大和市に「戦没台湾少年の慰霊碑」を建立したことが契機となり、少年工と日本との絆が再び強まることとなりました。慰霊碑建立とその後早川氏の台湾少年工遺族への慰霊の旅によって、ばらばらとなっていた元少年工たちが交流を再開し、各地の同窓組織の結成へと繋がっていききました。戒厳令解除の翌年、一九八八年(昭和六十二年)には台湾高座会第一回大会も開催され、昨年まで計二十五回開催されています。

台湾で民主化がすすむにつれて、元少年工たちも日本の地を踏む回数が増えていきましたが、少年工が第二の故郷と呼ぶ大和市との交流が本格化したのは、平成四年(一九九二年)五月のことでした。

当時、石川氏が市議会議長を務められていた大和市役所を台湾高座会の訪問団一行が表敬訪問、偶然に石川氏と再会を果たしたことが、それからの二〇年に及ぶ

大規模な交流の幕開けとなりました。同
 年秋に、石川氏がご子息と台湾を訪問さ
 れ、台湾高座会第五回総会に出席して、
 翌平成五年(一九九三年)六月の日本で
 の「台湾高座会留日五〇周年歓迎大会」
 開催につながりました。

この五〇周年歓迎大会は、大和を第二
 の故郷と思う元少年工らの台湾側出席者
 が千四百人に膨らみ、日本側は大和市民
 中心に千八百人の出席者が一堂に集つと
 いう盛大なものとなりました。平成十五
 年(二〇〇三年)には、「台湾高座会留日
 六〇周年歓迎大会」が座間市にて開催さ
 れました。この際には、石川氏をはじめ
 とする関係者の尽力により、一部の元少
 年工の方へは修了証書、また、大部分の
 方へは在職証明書が発行されて、大和市
 長と神奈川県議会からの感謝状が話題と
 なりました。しかし、日本国としては十
 分な台湾少年工への感謝の表明だったか
 どうかはよく考えなければいけないと思
 われます。

本年、平成二十五年(二〇一三年)は、
 元は紅顔だった台湾少年工が日本の土を
 踏んでから七〇年目となります。彼らの
 意向を汲んで、この五月九日、座間市市
 民会館で開催される「台湾高座会留日七
 〇周年記念歓迎大会」の実行準備が進め
 られています。

以上が石川氏の講演の概要ですが、こ
 の七〇周年記念大会へは、台湾からは約
 二百六十人の元少年工とその家族が出席
 されました。この機会に、森喜朗元総理
 大臣から大会会長名のメッセージと同内
 閣総理大臣名での感謝状が贈られました。



「雷電」の映像の前で、思いを語る石川氏

残念ながら予定されていた李登輝元総統
 は体調不良で欠席となりましたが、台湾
 からの参加者は「心に沁みだ歓迎大会だ
 った。流石は日本だ」とその感想を述べ
 ています。元少年工の皆さんも、かなり
 高齢になってきたため、恐らくはこれは
 最後の公式会合となるでしょう。

一連の台湾少年工のエピソードは、既
 に平成十七年(二〇〇五年)十月のNH
 Kラジオ深夜便「心の時代」で、石川氏
 が「台湾少年工との六〇年」というタイ
 トルで話されていました。石川氏は、台
 湾少年工の記憶を歴史に書き留めるため
 に、七〇周年記念大会に合わせ、本年
 (二〇一三年)五月に「二つの祖国を生
 きた台湾少年工」(並木書房)を刊行され
 ました。涙なくしては読めない本です。
 まさに台湾少年工よ、永遠なれです。ぜ
 ひ一読をしていただきたいと思えます。
 (講演会担当幹事 川村淳一・記)

大戦末期、労働力不足を補うため、八四〇〇人余の台湾の少年たちが志
 願して日本本土へ渡ったことを知る人は少ない――。日本と台湾の最も
 困難な時代を生き抜いた台湾少年工たちの苦闘の記録！

二つの祖国を生きた

台湾少年工

石川公弘 著

元台湾総統 李登輝氏推薦！

二つの祖国を生きた

台湾少年工

石川公弘
Ishikawa Kimihiro

1頁から続く

最後に、台湾の将来で不安に思うこと
 があります。それは世界中が自由貿易協
 定(FTA)に動いている中で、台湾に
 は中国とのECFA(中台FTA)のみ
 しか存在しないことです。その意味では
 国際的に経済孤立しかねない、ひいては
 台湾経済を弱めることになりかねない
 懸念するものです。同じような懸念は日
 本にもありました。しかし遅まきながら、
 日本も三月十五日に安倍首相がTPP参
 加を表明し、締め切り直前で滑り込んだ
 形です。日本はTPP参加表明により、
 これまでなかなか進まなかった日中韓
 (更に印・豪・ニュージーランドを加えた
 RCEP)、欧州との交渉も急速に進む局
 面となってきました。

TPPは環太平洋の自由民主国家・地
 域を対象としたものであり台湾は十分参
 加資格があります。加盟国各国も心の内
 では台湾の加盟を支持しているのではな
 いでしょうか。環太平洋の集まりの中で
 大きな経済力を持った台湾が入っていな
 いことが不自然であり、台湾政府は危機
 感を持ち、参加への根回しを静かに、し
 かし早急に進める必要があると考えます。
 日台稲門会として、今後とも日台の相
 互理解・友好に貢献して行きたいと思
 います。特に台湾からの留学生、早稲田を
 中心にした日本学生等、若者の交流にも
 力を入れて行きたく、今後ともに皆さま
 のご協力をお願いする次第です。

以上

（いわなが・やすひさ）昭和四十四年政
治経済学部経済学科卒業

台湾高座会留日七の周年歓迎大会 寄稿
李登輝總統とのふれあい
 会長 岩永 康久

二〇〇〇年に台湾に駐在し、二〇〇一
 年・二〇〇二年と台湾日本人会の会長を
 務めた事もあり、李登輝元總統とお目
 にかかる機会は多かった。しかし、李總統
 は雲の上の存在であり、お目にかかって
 も私が記憶に残るような関係ではなかつ
 た。その後、可愛がっていただけという
 になれたのは一九九九年九月二十一日の
 台湾中部大震災がきっかけだった。あの
 地震にて台中日本人学校が倒壊し、日本
 人社会では子息の通える学校が無くなり、
 途方に暮れた。李總統は地震直後の十月
 七日に倒壊現場まで慰問いただき、日本
 人社会の窮状を察し、翌日には早や校舎
 再建の為の代替地をご提案いただいた。
 再建は突貫工事で進められ二〇〇一年二
 月十二日には立派な新校舎での授業が再
 開できた。地震から回復が進まない地域
 が残っている中で、本式典への参加には
 李總統も躊躇されたようで、結局震災三
 周年の二〇〇二年九月二〇日に台中日本
 人学校を訪問いただいた(写真参照)。

エピソードだが、当日私は台北と台中
 間で大渋滞に巻き込まれ、李總統より遅
 れて到着してしまった。李總統も台北か
 ら向われたわけで、その前に言い訳など
 許されるものではない。学校でお待ちい
 ただいた李總統より「岩永くんは未だ着

いていないのか」と、しかし優しい叱
 責を受け、冷や汗をかいた事を忘れられ
 ない。余談ながら、李總統が促進された
 新幹線が当事業開通していれば、こんな事
 は無かったのですが。

その後は、ご自宅までお伺いする機会も
 得られ、李總統の「政治哲学・人生観・
 宗教観」等を聞かせていただいた。特に
 印象的だったのは、事実上半世紀にわた
 る国民党一党独裁政権の中で、台湾人と
 して頭角を現し、その後民主化を進め、
 国民の直接選挙による總統選挙までのご苦
 労。その過程では想像を超えるご苦労が
 あったようだが、抵抗勢力が強い中、目
 標に向かって着々と布石を打って完成さ
 せられた台湾の民主政治！正に李總統
 は「台湾民主主義の父」と言える。また、
 年齢を重ねられても、台湾に対する深い
 愛、日台関係を重要視し、人生を台湾の
 将来に捧げ、若者の真の意味での教育に
 貢献していききたいとの高邁な理想を感じ
 た。

私が住友商事を辞して、早稲田大学に
 て「日台中米関係(台湾に焦点)」の講座
 を持つようになったのも、李總統の影響
 が大きい。講座を始めて来期で六年目
 になる。毎年三月に講義の締めくくりとし
 てゼミ生を台湾研修に連れて行っている。
 この時は常に李總統との面談をお願いし
 ている。李總統は「岩永ゼミの学生に講
 話をし、議論するのは楽しい」と言って
 二時間半程の長時間を割いていただける。
 今年も三月初めに訪問した。「もう九二歳
 になったよ」と言っておられたが、昨年



台中日本人学校再建記念



二期生台湾研修

より寧ろ若返られた感じだった。台湾研
 修では政治経済・外交関係に加え企業訪
 問など多彩な方々との面談を設定してい
 るが、やはり学生達に取り一番印象に残
 り、今後の人生を考えさせられたのは李
 總統だったようだ。李總統のご健康で
 益々のご活躍を祈念しつつ。

(2013年3月31日)

台湾高座会 留日七〇周年歓迎大会

そもそも台湾高座会、台湾少年工とは何か？日台稲門会の諸子なら既に「存じ」とは思いますが、会報第十三号で紹介した朝日新聞記事要約を改めて再録します。

☆

台湾少年工（神奈川県大和市）

『きっかけは偶然の重なりからだった。』

一九九二年五月、神奈川県大和市の市議会議長だった石川公弘さんは、台湾からの訪問団を迎えた。今の大和、座間市などにまたがる場所にあった高座海軍工廠で働いた元少年工たちが、再訪する旅の途中だった。

「私もあそこで暮らしました」

石川さんが言うと、先方は驚きの声をあげた。「では、あの石川先生の息子さんですか」

石川さんの父、明雄さんは、寄宿舎の五人の舎監の一人として少年工の面倒を見た。石川さんも同じ敷地に住み、食堂で少年工と肩を並べた。

「もしあの日市長が在籍していたら、議長長の私がかうこともなかった。まったくの偶然でした」

石川さんは台湾で開かれた少年工の同窓会「台湾高座会」に招かれ、李雪峰会長から「渡航五〇周年の来年は、ぜひ第二の故郷、大和で大会を開きたい」と頼

まれた。そして九三年六月、元少年工ら千三百人が、四〇台のバスを連ねて大和市を訪れ、日本側も千八百人が集まって歓迎した。

※※

日本の敗色が濃くなってきた四三年、迎撃戦闘機「雷電」の製造を目的に高座海軍工廠が建てられ、動員され不足する工員の穴を埋めたのが台湾少年工たちだった。三年勉強し二年実習すれば、旧制中学と同等の卒業資格を与えるとの条件に希望者が殺到、厳しい選抜を経た八千人の工員の大半は、国民学校高等科の在籍者か卒業生。指導者として旧制中学生四百人も加わった。実際は技師らを養成している余裕などなく、少年たちは各地の工場で働きながら技術を学び、高座に戻って三交代で戦闘機づくりに従事した。製造した雷電、百二十八機。

敗戦とともに少年工の管理は海軍省から厚生省、さらに神奈川県に移されたが、八千四百人を世話する事務官は一人だけだった。混乱の中で、みんなを諭したのは石川明雄さんだった。

「舎監は親身になって相談に乗ってくれた。身の振り方を考えろ、といわれ、自治会をつくりました。李会長が振り返る。

※※

苦難の日々を過ぎたにもかかわらず、元少年工には今も親日家が多い。

「ひどい目にあつたという人もいたが、戦局の悪化でゆとりがなくなつたのだから。給料を貰っていたし、厳しい生活は

誰も同じだった」と、台湾高座会の謝清松秘書長は話す。大陸から逃れてきた国民党政権が本省人を弾圧したことも昔を懐かしむ土壌となった。戒厳令下では同窓組織を作ることできない。

高座工廠技師だった故・早川金次氏が大和に、「戦没台湾少年工の慰霊碑」を建て、台湾で慰霊の行脚を続けた。戦時中、空襲などで亡くなった少年工は約六〇人。八七年に台湾で戒厳令が解除されると翌年、台湾高座会が結成された。石川さんは、二〇〇三年に大和で六〇周年の歓迎会を開き、厚生労働省は、中学卒業証明書や在籍証明書を発行した。

☆

「三年後の七〇周年は、里帰りの最後の年になるでしょう」

そして、去る五月九日木曜日、台湾からの元少年工二百五十人を迎え、台湾高座会留日七〇周年歓迎大会実行委員会主催の歓迎大会が、座間市市民会館ハーモニーホール座間（神奈川県）で開催されました。

歓迎大会会長には森喜朗・元内閣総理大臣（総理の特使としてキューバへ派遣されたため欠席）、副会長には甘利明・経済再生担当相（国会開会中のため欠席）、平沼赳夫・元経済産業相、日華親善議員連盟会長はじめ各界を代表し台湾との紐帯を大切にす方々が就かれました。なお平沼氏は国会開催中のお忙しいなか採決を済ませて慌しく駆けつけられました。後援は交流協会と台北駐日経済文化

代表處、協力団体には高座日台交流の会、日本李登輝友の会、日華親善協会、神奈川県議会日華議員連盟、そして日台稲門会も参加しました。

実行委員会委員長は石川公弘・日台稲門会前会長が務め、また真鍋藤正、北村友雄、栗山威郎の皆さんが副委員長を担いました。

日台稲門会からは当会が協力団体に名を連ねていることもあり多数の有志と学生が参加し、元少年工たちの一〇年ぶりの帰国を心から歓迎しました。

まずは、益田駿・実行委員会副委員長の開会の辞のあと、高座会会歌「故郷を離れて」（台湾少年工・李添石氏、日本名・本島徹太郎、作詞）の全員での合唱で開式。

故郷を離れて幾千里
荒なみ越へて堂堂と
向うは其の名も香はしき

（二番・三番略）

腫れて痛むも誰に言う
母は千里の彼方島
我が子よ達者で働けど
祈る母の幻か

険に故郷を浮かべつつ
いつになったら帰るやら
過ぎしあの日を語りつつ
緑の島が戀しいぞ

石川実行委員長による歓迎大会開催に

至る経緯の紹介があり、続いて森・元首相名による感謝状が、(欠席の森・元首相に代わり)平沼赳夫・日華親善議員連盟会長から台湾高座会各区会代表に贈呈されました。この感謝状は、多くの元少年工から「日本の経験を語れず、今も子孫に理解されない」という苦悩を聞いた石川委員長が森・元首相に熱心に働きかけ実現したものだ。感謝状は、元少年工が日本にいたこと、高座工廠で働いていたこと、唯一の証なのです。李登輝・前総統の言うように、彼等は終戦までは「日本人」だった。このことを我々は忘れてはならないと思います。

感謝状贈呈式に続き平沼議員の歓迎の挨拶。台北駐日経済文化代表處からは羅坤燦・副代表が駆けつけ、心こもった挨拶で元少年工の苦勞を労われました。前半最後は李雪峰・台湾高座会会長のお礼の言葉、春の叙勲で旭日小綬章を授けられたことに関し、「この叙勲は私一人に与えられたものではなく、會員全員に与えられたもの」と述べられました。

休憩の後、体調を崩され訪日が適わなくなった李登輝・前総統や蔡焜燦氏に代わって、遠藤三起夫・座間市長による代理講演がありました。

続くアトラクションの部では、ノーベル化学賞受賞者の根岸英一さん(石川委員長の中高時代の学友)によるノーベル賞を如何に取るかについてのノウハウ(我々凡人には全く役に立たず、孫子の代の教育環境改善を期すしかないことは理解できた)伝授のあと、「オーソレミヨ」

「千の風になって」「昴」の三曲を朗々と歌い上げ、天才と云われる人物は何でも一徹で一流なのだと思心しました。続いて日台稲門会から北村友雄幹事が出演、元少年工・洪坤山氏の短歌を吟じられました。

北に對(む) 千年の始めの祈りなり
心の祖国に榮えあれかし

しもやけの指の痛みに耐え耐えて
油の滲む服洗いたり

わが波乱の人生のその一コマに
大和村なる少年期の日

最後は何春樹・台湾高座会副会長のお礼の言葉、今年が最後と思っていたが80周年も是非やりましょう、との力強い決意が表明されました。

補足しますが、日本には日本高座会があります。こちらは戦後日本に残留した約百名の元少年工及び日本人関係者により結成され、きっかけはやはり故・早川金次氏の慰霊碑建立によるもので会長は呉春生氏、台湾高座会とは別組織なので日本高座会と称しているとのことです。

□ □ □

いつも考えるのは、この老人たち・老少年工はなぜこうなんだろうということ。恨みがましいことを一切いわず、「大和は第二の故郷です」この地で経験した試

練は、帰国してからも自信となって、あらゆる苦難を克服することができました。「わたしたちは日本人だったのです」と繰り返す彼らのよすがはどこにあるのだろうか。

台湾に赴任するまえの自分の浅薄な常識では、日本は「植民地支配と侵略によって、多くの国々、とりわけアジア諸国の人々に対して多大の損害と苦痛を与えた」ことから「痛切な反省の意を表し、心からのお詫びの気持ち」を持たねばならず、それにより罪悪感と贖罪感がないまぜとなっていた。(一)内は村山談話その意識から、戦後日本は自らの復興に合わせ、これらの国々に対し惜しみない援助を続けてきた。しかしほとんどの国は、それでは不足だといいたるのが現実。あまつさえ、自国の歴史観を持ちだし、正しい歴史を学べという。

元少年工たちは終戦と同時に教室と職場と国籍を失った。台湾に戻ったあとも日本の軍閥に協力したなぞ国民党政権下では口にすることもできなかったろうし、それも「裸で狼の群れのなかに」捨てられたようなものかも知れない。それなのに、自分たちの青春を無茶苦茶にした日本政府は謝罪しろ、とか、強制連行に對し賠償金を払え、なぞとはちっとも思い浮かばず、日本を懐かしみ、慈しみ、大事に思い、こんな日本でも心の故郷、第二の祖国と呼んでくれている。

繰り返すが、老少年工たちは日本人にとつてどういう存在で、我々はこれにどう応えるべきなのか。日本は台湾を捨て

去った、というテーマは映画「海角七号」でも描かれていたが、少年工たちもまた見捨てられた存在であった。日本政府はもう少し矜持を保ち、公正と信義のある諸国民を峻別すべきではないか。(齋藤・記)

春の叙勲、台湾から3人受章

日本政府による4月29日付発表の2013年春の叙勲受章者の外国人叙勲のうち、台湾からは次の方々3名が受章されました。

- 許 敏恵さん(89) 元・台日文化経済協会会長、台湾京都大学同窓会会長 旭日中綬章
- 鄭 世松さん(82) 元・台日商務協議会会長、現・東亜経済人会議台湾委員会名誉副会長、元・中国国際商業銀行頭取、東京支店長 旭日中綬章
- 李 雪峰さん(86) 現・台湾高座会日交流協理 会長(初代) 旭日小綬章

台湾高座会 留日70周年歓迎大会記念誌



日時：2013年5月9日(木) 13時 開会
会場：神奈川県横浜市市民文化会館 1階201-1ホール
台湾高座会留日70周年歓迎大会実行委員会



歓迎大会開催の経緯を説明する石川実行委員長



平沼赳夫・日華親善議員連盟会長から台湾高座会各区会代表に感謝状贈呈



感謝状を手にする台湾高座会各区会代表



ノーベル化学賞受賞者・根岸英一さんの独唱



北村友雄幹事の詩吟



PRONTO
CAFFÈ & BAR 1988

美しいパスタとコーヒーで、皆様のお越しをお待ちしております!

<プロント 越谷レイクタウン店> 

〒343-0826 埼玉県越谷市東町4-21-1 イオンレイクタウンKAZE C201
TEL:048-934-3201 最寄駅:越谷レイクタウン駅

営業時間:平日、土、日、祝日 カフェ 9:00~17:00 パー 17:00~23:00 定休日:無休

<プロント 大手町カンファレンスセンター店> 

〒100-0004 東京都千代田区大手町1-3-2 大手町カンファレンスセンターB1F
TEL:03-6212-0036 最寄駅:大手町駅

営業時間:平日カフェ 7:00~17:00 パー 17:00~23:00 土カフェ 8:00~17:00 定休日:日祝

<プロント カレッタ汐留店> 

〒105-0021 東京都港区新橋-8-2 カレッタ汐留B2F
TEL:03-5537-2344 最寄駅:汐留駅 新橋駅

営業時間:平日カフェ 7:00~17:30 パー 17:30~23:00 土カフェ 10:00~17:30
パー 17:30~22:00 日、祝日カフェ 10:00~18:00 定休日:不定休

会員・会友寄稿

北ビルマでの

国民党軍と日本軍の死闘

川村淳一

一見台湾とは直接の関わりがなさそうなタイトルですが、実はビルマ(現ミャンマー)は台湾とも結びつきがあるので、私がミャンマーに駐在していた二〇〇九年、現地合弁会社の専任運転手の父親は八〇歳台ですが、台湾出身でした。太平洋戦争中は国民党軍に属し、戦後はビルマ国軍の空軍軍人として働いたという彼の教養な経歴を知ったことから、戦時中のビルマにおける蒋介石の国民党政府と日本との戦いに関心が向き、自分なりに調べてみました。今回その一部を紹介したいと思います。

ビルマでの日本軍の戦いといえば、悪名高い「インパール作戦」を挙げられる方が多いと思います。これは、日本軍と英印中心の連合国軍とが戦ったものですが、北ビルマでも国民党軍と日本のビルマ方面軍との間で、これに劣らない死闘がありました。

日中戦争が勃発した後、連合国側はインドのアッサム地方から北ビルマを経由して中国の雲南省を抜けて重慶の国民党政府までの軍事・援助物資を送る輸送路、いわゆる「援蒋ルート(ビルマ公路)」を建設して、国民党政府と軍を支援していました。ところが、一九四二年(昭和十七

年)春に日本軍がビルマを占領し、この補給路を遮断した結果、国民党政権の屋台骨が危くなることになりました。そのため、連合国側は圧倒的な制空権のもとで、補給路を物資の空輸(千トン/日ペース)に切り替えたのです。しかし、空輸ではスコール等の悪天候による停滞もあるために、新たな陸上補給路として、北アッサムのレドを起点に中国雲南省の昆明までの、レド公路(全長千八百キロ)が計画されました。

このレド公路は、一九四五年(昭和二〇年)一月に完工しましたが、日本軍はインパール作戦と同時に並行的に、印支遮断(インドと中国の連絡路を断つ)を目的とするいわゆる「断作戦」が実行されました。この作戦のもと、中国雲南省と北ビルマに広がる峻険な山岳国境地帯では、国民党軍(雲南遠征軍)二〇万人、予備軍を入れると約三〇万人と日本のビルマ方面軍の一部、第三十三軍の二万人強とが激戦を行ったのです。

衛立煌將軍が率いる蒋介石直属の雲南遠征軍は、蒋介石の軍事顧問でもあった米国のスチルウェル將軍の支援により、インドで連合軍式の訓練を受けました。そのうえ米軍と同様の近代兵器を装備、航空戦力の支援のもとに新たな補給ルートを貫通させる目的で、ビルマ国境に向けて進軍しました。戦後、台湾を占領した国民党軍兵士は、粗野で身なりも粗末な中国兵という見方が多いのですが、雲南遠征軍の兵士は、重慶の国民党政府が選抜した愛国心の強い学徒兵で、十代の若い兵士が大半でした。年齢から見ると、まさに台湾少年工と重なる

るくらいですが、日本軍がそれまで戦った中国兵とは装備も士気も大きく異なる軍隊だったといえます。

日本側第三十三軍の主力となった久留米出身の龍兵団と菊兵団も、陸軍の中では精鋭といわれた師団で、はじめは優勢に戦っていましたが、しかし、最後は弾薬・食糧の補給もなくなり、圧倒的な装備と人員を誇る雲南遠征軍に包囲された結果、一九四四年(昭和十九年)九月の竜陵会戦で、雲南省にあった龍兵団の拉孟(らもう)、騰越(とうえつ)の守備陣地は玉砕してしまいました。この会戦で最終的に日本側は四千三百人、中国側は六万三千人が亡くなったといわれており、実際の犠牲は中国側が何倍も多かったのです。ちなみに、この戦闘での日本軍將兵の奮闘は、蒋介石も称えるところとなっています。

国民党軍の雲南からビルマへの遠征の結果、冒頭に述べたように、元国民党軍兵士だった方が、今は引退してミャンマーのヤンゴンで暮らすことになりました。実際には、少なからぬ国民党系の元兵士がミャンマーに住んでいると思われれます。実際、ミャンマーの古都マンダレー以北では中国系住民が多く、中国語の看板もしばしば目にするからです。おそらくは、日本兵の生き残りの方も、ミャンマーの国境地帯などで暮らしていたのではないのでしょうか。現在、ミャンマーは民主化がすすんでいると報道されていますが、七〇年前の日の死闘にも思いをはせてみたいものです。(かむむらじゅんいち||昭和五十五年政治経済学部政治学科卒業)

新たな次元の日台交流へ

早稲田大学政治経済学部二年 劉彦甫

二〇一一年の東日本大震災で台湾が破格の義捐金を日本に寄付したこともあり、近年日本において親台度が高まっていることが身をもって感じられる。尖閣諸島(台湾名 釣魚台)において領土問題があるが、漁協協定を締結(沖縄の反発がある)したことからも日台関係は非常に良好であるといえ、日台交流が今後も盛んになってくることが予測される。一方で、現在の日台交流には弱点があるように思われる。「親台の人は多いが、知台の人は少ない。」「親日の人は多いが、知日の人はいく感じることである。これが現在の日台交流の弱点ではないだろうか。現在の日台交流は文化面が中心である。日本と台湾は相互にパブリックディプロマシーを展開し、それは一応の成功を収めているだろうか。しかし、それはそれぞれ市民に相手への抽象的な好印象をもたらしているにすぎないのではないか。台湾(日本)が好き一般的な日本人(台湾人)に台湾(日本)の政治・経済・社会・歴史等を尋ねてどこまでの返答を期待できるだろうか。私の実体験では、台湾がかつて日本の植民地であったことを知らない台湾好きの日本人もいた。相手に対する最低限の知識をもたないこのような状況の上に築かれている関係は、いざ誤解や食い違いを生み、崩壊することになる可



能性があるのではないだろうか。
 このような状況を解決するためにも相互理解を深めるための新たな次元の日台交流が必要である。そのためには、日台交流を扱う団体や日台研究を行っている機関が互いに分かれず緊密に協力し、日本と台湾への認識を人々に深めてもらうためのさらなる日台交流について検討することが必要である。これが私を含めた日台交流に寄与しようとする者に今後必要なことであるだろう。

書籍紹介
 齋藤晃

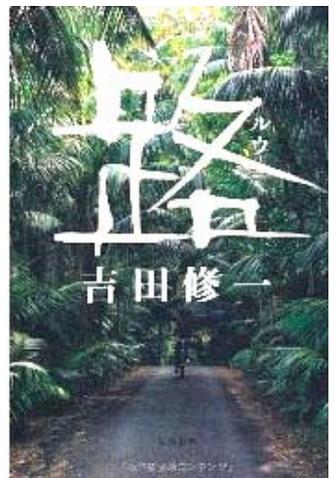
「日本統治下の台湾」
 坂野 徳隆 著 (平凡社新書)



国島水馬(くにしまたすいば)は第一次大戦直後の一九一六年(大正五年)、たまたま台湾に博覧会を見物に来て、そのまま一九三四年(昭和九)まで居着き、『台湾日日新報』に臺日漫畫(風刺漫画)で腕を揮った漫画記者。いつ日本で生まれ、また日本に戻ってからも何をしていたのかは記録にない、謎に包まれた人物らしい。ともあれ、台湾新聞界に初めて漫画を持ち込んだ国島は、約二〇年間台湾の政治、経済世相、事件をはじめ風習・風俗を風刺した漫画を連載し、当時の貴重な市井の記録ともなっている。日本国内の時事漫画と比較しても興味深いと思うが、これを現在の歴史観で論ずるのは誤りだと思ふ。

「路(ルウ)」

吉田修一 著 (文芸春秋)



台北・高雄間三四五kmを最高時速三百kmで結ぶ台湾新幹線(台湾高速鐵道/Taiwan High Speed Rail)の建設プロジェクト紆余曲折の道のり、と思いきや、日本人女性と台湾人青年のすれ違いや複数の人間関係が絡み合い、それぞれの「路(ルウ)」を見出すというお話。映画「海角七号」にも似た、台湾と日本の特別な關係を描いた作品。色々な視点から愉しめる。

「台湾海峡 一九四九」

龍應台 著 / 天野健太郎 訳



インタビューを重ねに明らかになる、それぞれの一九四九年。何が善で何が悪かで片付けられない、重い話です。意外な方々の経験がまたそれぞれの歴史。

鈴木歯科クリニック
 Suzuki Dental Clinic

東京都豊島区池袋4-25-1
 絨亜ビル1F 〒171-0014

Phone 03-5950-8241
 Fax 03-5950-8242

歯科医師 / 歯学博士
鈴木 章 敬
 Akiyoshi Suzuki, D.D.S., Ph.D.

タバコ 肥満は歯周病リスクを高めます

適切な口腔ケア(歯ブラシ・舌ブラシなど)で歯周病は予防できます! 更に、カゼ、インフルエンザの予防になります!

よく噛んで! 歯周病予防と肥満予防!

口腔ケアで高齢要介護者の誤嚥性肺炎を予防しましょう!

映画紹介

齋藤 晃

「KANO」(嘉農)

製作 魏徳聖/監督 馬志翔

昭和六年(一九三一年)、台湾の嘉義農林学校野球部は近藤兵太郎監督(松山商業学校・早稲田大学)のもと第十七回全国中等学校優勝野球大会(現・全国高校野球選手権大会)夏の甲子園に出場し、決勝戦で0-4で敗れたものの、この年から史上唯一の三連覇を達成する中京商業と熱戦を繰りひろげた。本作品は嘉義農林の準優勝までの道と八田與一のエピソードを織り込んだもの、とのこと。

戦績は、二回戦 対 神奈川商工 3-0、準々決勝 対 札幌商 19-7、準決勝 対 小倉工 10-2、初出場ながら大変な快挙。メンバーは、1番 平野保郎(羅保農 本名不詳・アミ族) 外野手、2番 蘇正生 外野手、3番 上松耕一(陳耕元 本名アシワツ) 内野手、4番 呉明捷 投手、5番 東和一(藍明德 本名ラウイ) 捕手、6番 真山卯一(拓弘山 本名マヤウ) 内野手、7番 9番は日本人で、小里初雄、川原信男(内野手)、福島又男(外野手)、また補欠は崎山敏雄、里正一、谷井公好、積真哉、劉蒼麟、という記録が残っている。映画で確認してください。結局近藤監督率いる嘉義農林チームは、春一回、夏四回甲子園に出場という輝かしい記録を残したのである。

また投手・四番打者の呉明捷は早稲田大学に進んで一塁を守り四番打者、長嶋茂雄に破られるまで東京六大学の本塁打記録を保持した。

なお、近藤は名監督飛田穂洲(明治十九年生)の二年下、近藤が野球部にいたかどうかは分からないが交流はあったのだろうか。「熱球三十年」には見あたりず。監督は「セテック・バレ」で頭目・ワリスを演じた馬志翔、「海角七号」「セテック・バレ」の魏徳聖監督はプロデュースに回った。日本からは近藤兵太郎役の永瀬正敏、八田與一役の大沢たかお、伊川東吾、坂井真紀が出演している。台湾での上映は来年二〇一四年春節の予定、そのあと夏の甲子園に合わせた日本上映も目指している。

「台湾 アイデンティティ」

監督 酒井充子

公式サイト 基本データより

情報: 日本統治時代を経て、第二次世界大戦、二二八事件、白色テロの時代を生き抜いた台湾の(日本語世代)と呼ばれる老人たちの人生に寄り添うドキュメンタリー

説明: 東日本大震災の際、台湾からは二百億円を超える義援金が寄せられ、昨年には日本から過去最高の約百四十四万人が台湾を訪れました。これまで以上に日本に親しい国として関心を集める台湾。

<http://www.t-pic.com/taiwandentity/>



かつて日本人だった人たちが語る
それぞれの人生

台湾 アイデンティティ

「台湾人生」 酒井充子 監督作品

彼らが求めた居場所とは
戦後70年の道のり
台湾、ジャカルタ、そして横浜へ

当会会友の酒井充子監督による「台湾人生」(〇九)、「空を拓く建築家・郭茂林」という男(十三)に続くドキュメンタリー作品。本年七月六日(土)よりポレ東中野で公開されるとのことです。その後、神奈川はじめ、甲信越、東海、関西、九州、沖縄で順次公開の予定。「かつて日本人だった人たちが語るそれぞれの人生」。是非作品を観て、台湾を応援しましょう。

スタッフ 監督: 酒井充子、プロデューサー: 植草信和、古関智和、製作総指揮: 菊池篤人、小林三四郎、企画: 片倉佳史、撮影: 松根広隆、編集: 糟谷富美夫、音楽: 廣木光一、ナレーター: 東地宏樹



第16期定時総会 会場風景

新会員・会友紹介

前回総会以降入会された会員・会友の皆さんを紹介いたします。台湾をよみなが愛するかたがたです。また学生会員・会友の入会が増えています。

一新会員

石井 達也(いしい たつや)さん

昭和五十九年政治経済学部政治卒業 入会
動機:日台友好

笠原 学(かさほら まなぶ)さん

昭和四十七年理工学部卒業 ※再入会

佐藤 貴仁(さとう たかひと)さん

日本語教育研博士後期課程 学生会員

篠江 裕行(しのえ ひろゆき)さん

平成二二年商学部商研修士在学中 学生会員 入会動機:二〇〇九年〜二〇一一年一月まで国立台湾大学にダブルテイルプログラムで留学していたため、日本でも台湾との関係を持っていたい。

篠山 秀夫(しのやま ひでお)さん

昭和四八年教育学部卒業 入会動機:お世話になった諸先輩との交流。

柴田 巧(しばた たくみ)さん

昭和六二年大学院政治学研究所修了 入会動機:日台関係の発展に寄与したいと思いい入会を希望します。

鈴木 康徳(すずき やすのり)さん

平成十一年政治経済学部政治卒業 入会動機:数年前から毎年、台湾校友会に参加しており、日台稲門会の方々に大変お世話になっている。今後とも台湾とのつながりを持ち続け、台湾との交流を深めて行きたい。

石 超学(せき ちょうう)さん

平成十五年早稲田ビジネススクール 入会動機:台湾の好きなお方と交流したい。

高橋 史郎(たかはし しろう)さん

昭和五十八年第一文学部卒業

チェン・クリスティーヌ(CHEN CHRISTINE)さん

社会科学部在学中 学生会員 入会動機:日本の先輩方との交流、日本人の友人作り。

平山 泰朗(ひらやま やすろう)さん

平成九年政治経済学部経済卒業

松田 哲也(まつだ てつや)さん

平成元年社会科学部卒業

松原 仁(まつばら じん)さん

昭和五六年商学部卒業

三村 達也(みむら たつや)さん

文化構想学部在学中 親学生会員

宮下 繁明(みやした しげあき)さん

昭和五六年商学部卒業(早稲田精神昂揚会) 入会動機:台湾と日本との友好関係

を深めたい。

山口 拓(やまぐち たく)さん

平成十八年大学院公共経営研究所卒業

山本 彩加(やまもと さいか)さん

社会科学部在学中 学生会員 入会動機:岩永先生の講義を通して台湾に興味を持つようになり、また九日の日台稲門会での羅坤燦副代表の講演と日台交流の集いを通してさらに興味が増えました。

劉 彦甫(りゅう ちえんぷ)さん

政治経済学部経済学科在学中 学生会員 入会動機:早稲田大学の発展と台湾との交流に微力ながら寄与したいというものがあ。昨年十月に行われた秋季講演会と懇親会に参加した際、貴会のすばらしさを実感できたことも貴会に入会する動機です。

一新会友

飯沼 昭治(いひぬま しょうじ)さん

三台会、慶應義塾大

牛丸 繪梨佳(うしまる えりか)さん

お茶の水女子大学文教育学部言語文化学科 学生会友

小川 隆(おがわ たかし)さん

三台会、慶應義塾大経商部卒業

塚本 正樹(つかもと まさき)さん

入会動機:台湾とのビジネス及び友好関係推進。

房野 忠典(ほおの ただのり)さん

入会動機:日本にとって歴史的にもっとも縁のある大切な隣国の台湾のことを勉強し、友好の一助になりたい。

圓本 武喜(まるもと たけよし)さん

三台会、慶應義塾大

宮内 真由子(みやうち まゆこ)さん

和田 滋(わだ しげる)さん

三台会、昭和四九年慶應義塾大学文学部社会学卒業 入会動機:台湾での早慶戦以来の縁を大切にして、日台交流に協力したい。

また大変残念ではありますが、次のかたがたが退会されました。長い間お世話になりました。

一退会会員・会友

浅井 利明さん、小曾根将隆さん、簡野肇平さん、近藤良三郎さん、白鳥 和夫さん、譽 清輝さん、鵜田 一夫さん、宗像亀美男さん、藍 進明さん、小鮎慶子さん、スヴェトラナ・ヴァシリョクさん、坂井 優さん



岩永台湾講座生台湾研修

二〇一三年三月

岩永 康久

今回の研修旅行は小生が早稲田で講座を始めてから早や五回目になります。三月三日〜八日のスケジュールにて、十六名の学生を連れて行ってきました。また今回は初めての試みとして、立法院を訪問。今年度のゼミ生の中に日華議員懇談会台湾側会長である李鴻鈞立法委員の甥(劉彦甫くん)が在籍したこともあり、立法院を見学しました。江宜輝・行政院長と民進党議員の白熱した議論が展開されており、王金平院長も議会の休憩時間を利用して写真撮影に出てきてくれました。今年の学生も講義で学んできたことと台湾の現実の姿を自分の目で確かめながら、更に突っ込んで日台関係を知りたいとの意気込みが感じられました。特に交流協会での質疑応答は際限なく、幸いにも岡田部長が時間オーバー問題なしとのことで昼食時間に大幅に食い込み、最終的に質問を打ち切りざるを得なかった程でした。研修ではいろいろな角度から台湾の政治・経済が見られるように、また台湾の若者の意見も聞けるように台湾大学学生との討論会・懇親会も手配しました。スケジュールは以下通りでしたが、訪問・面談においてはそれぞれ貴重な話が多く、個別に詳細を記載したい所ですが、紙面上の制約があり、トピックスのみ後述することとし、添付写真・以下スケジュール

ルより類推下さい。

李元總統は岩永ゼミ生の訪問を気にしていたとき、予てより「何時でもいいからいらっしやい」と言っていたいただきました。高年齢だけに、健康状態が心配されましたが、寧ろ昨年より元気になられたと感ずる程でした。「世界のためにアジアの指導者たれ」と言う演題で講演をいただきました。その後質疑応答になり、学生からいろいろな質問が出るにつれ、益々熱がこもり、二時間半に及ぶ面談をいただきました。今年も別れ際に「岩永ゼミ生との面談は楽しいね」とのお言葉をいただきました。学生達も偉大な政治家の話に強い感銘を受けた様子でした。

三三会(台湾における大手企業の団体)との昼食会では江丙坤会長が初めて出席されました。これまでは海峡交流基金会会長として中台E.C.F.A(兩岸経済協力枠組協定)の締結、交渉に忙殺されておられましたが、昨年海基会会長を退かれ、今回は三三会会長として出席されました。これからは以前より進めていた日台交流に更に貢献したい、学生との懇談も大事だと言った事で、國賓大飯店にて豪華な食事会を馳走になりました。

二二八纪念馆を案内してくれた蕭錦分氏は酒井充子監督の「台湾人生」にも登場されている方で、実体験に基づき真に迫る話を聞かせていただきました。南部訪問は今年も烏山頭ダムを訪れました。ゼミ生の前田くんが八田與一の高校の後輩である

為、昨年に引き続き訪問した次第です。台南科学園區も訪問、台湾の電子分野の巨大さ、先進性には驚いたようです。嘉義から台南までの全工程を台南市がすべて手配してくれ、台南の郷土料理も馳走になるなど大変お世話になりました。バイオテックの会社、奇美実業の社会貢献事業見学も手配されていました。

日系企業訪問としては瑞穂銀行を訪問しました。戦前の日本勸業銀行時代からの活動を通じて培われた、金融分野での突っ込んだ台湾への関与が伺われました。亜東関係協会訪問は小生の再確認が漏れていたため、すれ違いとなり、急遽古巣の台湾住商に立ち寄りとなりました。

最後の晩は台北稲門会の夕食会に招待いただきました。今年も例年と違った手法でと言うことで秋台先輩が台湾のデータを纏めて説明いただき勉強になりました。その後は先輩・後輩交際の飲み会となりましたが、今年はハチャメチャやる学生がいなくて、比較的穏やかな雰囲気飲み会となりました。

最後に、学生のなかには日本の戦後教育の中で加害者意識を持ち続けていた者もあり、いろいろ考えることが多かったようです。比較的高齢な方はかりでなく、台湾大学学生との討論会・夕食会を通して若者も非常に親目的で、中・韓の歴史批判とは違つ、客観的事実に基づく台湾の肯定的歴史観がある事を自分の目で確かめることができましたようです。(日台稲門会会長 岩永記)



八田與一記念像の前で



李登輝元總統の講演・討論会 二時間半に及ぶ

2013年3月	早稲田大学	岩永ゼミ台湾研修
2013/3/3(日)	13:25 集合	成田空港第二ターミナル(スカイツアカウンター前)
	15:25 成田発	CX-451 台北桃園 18:35
4日(月)	市内観光	故宮博物院・忠烈祠・101・龍山寺・中正紀念堂
	昼食	三三会 江丙坤会長・郭秘書長(國賓飯店)
	夕食	夜市
5日(火)	9:20~10:30	立法院(李鴻鈞立法委員)王金平院長
	11:00~12:30	228紀念館(“台湾人生”蕭錦文氏 案内)
	14:00~15:30	亞東關係協會 廖了以会長 ⇒ 台湾住商に変更
	16:00~	台湾大學 討論会
	夕食	台湾大學 親睦会
6日(水)	8:00 台北発	高鐵嘉義 9:24
		烏山頭ダム(八田與一)
		台南科学園区(+企業訪問)
		台南市 趙国際局長
	20:15	台南発(22:00 台北着)
7日(木)	9:00~10:30	瑞穂銀行(馬場支店長)
	10:45~12:00	交流協会(岡田部長)
	15:00~17:30	李登輝元総統
	夕食 19:00	台北稲門会(樺慶川菜)
8日(金)	台北桃園 12:50	CX-450 成田 16:55 帰国



江丙坤三三会会長(前海峽交流基金会会長)
國賓大飯店にてご馳走に



台北稲門会主催歓迎会 陳光敏台湾校友会
会長も参加、後方が長田幹事長



立法院委員会室にて 李鴻鈞立法委員(日華議員
懇談会副会長) TVで放映される乱闘騒ぎは
この場所です



立法院前で 王金平立法院長、李鴻鈞立法委員と

日台稲門会会則 改訂案

第一条(名称) 本会は日台稲門会と称する。

第二条(目的) 本会は会員相互の親睦を図り、早稲田大学の発展に協力し、あわせて台湾との交流を深めることを目的とする。

第三条(会員および会友資格) 会員は日本に居住する早稲田大学の校友または学生で、多少でも台湾にゆかりのある者とする。

2、会友は本会活動目的に賛同する者で、会員の推薦により幹事会で決定する。

第四条(役員を選出) 本会は次の役員を置く。

会長一名、副会長若干名、幹事長一名、副幹事長一名①、幹事若干名、会計一名。

2、会長は幹事会の推薦を経て総会で選定する。

3、副会長、幹事長、副幹事長①、幹事、会計は幹事会の推薦を経て会長が委嘱する。

第五条(役員任期) 役員任期は次のようにする。

一、会長の任期は定期総会終了の時から二年後の定期総会終了の時までとする。ただし、再任を妨げない。

二、会長以外の役員任期も会長の任期に準じる。

第六条(役員職務) 役員は次の会務を執行する。

一、本会の諸会合に関すること
二、会員名簿の整理並びに発行に関すること
三、その他の本会の目的達成に必要な行事の企画。

第七条(会長・副会長・幹事長・副幹事長②の職務) 会長は本会を代表し、本会の運営を統括する。

2、幹事長は会長・副会長を補佐し、会長・副会長に事故ある時はこれに代わる。

3、副幹事長は幹事長を補佐し、当会の円滑なる運営を図る。

第八条(監査役) 本会は監査役を置く。

2、監査役は会長の委嘱を経て総会で選出する。

3、監査役は会計監査を執行する。
4、監査役の任期は定時総会の時から二年間とする。

5、任期の満了前に退任した監査役の補欠として選任された監査役の任期は、退任した監査役の任期の満了する時までとする。

第九条(幹事会) 幹事会は、会長、副会長、幹事長、副幹事長①、幹事、会計をもって構成し、必要に応じて会長が召集して本会の運営に必要な事項を協議、決定する。

第十條(総会) 本会は幹事会の決定を経て毎年一回、会長の招集により定期総会を開催する。ただし、会長が必要と認めた時は、幹事会の議を経て臨時総会を開催することができる。定期、臨時総会において会長は議長となり、決議は出席会員の過半数をもって成立する。

第十一条(事務所) 本会の事務所は、関東地区内の役員宅に置く。

第十二条(経費) 本会の経費は、会費、寄付金、その他の収入をもって支拂う。

第十三条(入会金および年会費) 本会の会費は次のとおりとする。
一、入会金は金二、〇〇〇円とし、年会費は金五、〇〇〇円とする。

二、年会費を継続して三年間未納の場合、本会を退会したものと見做す。

三、学生会員および卒業後一年未満の会員は年会費を免除する。また学生会友についてもこれに準ずる。④

第十四条(会計年度) 本会の会計年度は四月一日より翌年の三月三十一日までとする。

第十五条(名誉会長、顧問) 名誉会長、顧問は幹事会の推薦を経て会長が委嘱する。

第十六条(会則の改訂) 本会則の改訂を必要とする事項については、直近の総会において事後承認を求めなければならない。③

(付則)

本会則は平成九年一月一日より施行する。
平成十二年四月十五日 一部改訂
平成十三年四月七日 一部改訂
平成十五年四月十二日 一部改訂
平成二十四年六月九日 一部改訂
平成二十五年六月一日 第四条 第七条、
第九条、第十三条 改訂、第十六条 新設

〔備考〕

- ① 副幹事長の設置
- ② 副幹事長の位置付けと職務
- ③ 会則の改訂方法(第九条から独立させる)
- ④ 学生会員・会友の年会費免除



訃報

校友会校友の簡燦雲様が二月二日逝去されました(享年九十二)。心よりお悔やみ申し上げますと共に、ご冥福をお祈りいたします。なお、葬儀は二月二十五日に執り行われました。

簡燦雲 老菩薩 孝男
簡肇衡 様 簡肇蒙 様 簡肇能 様

二〇一三年二月二十一日
日本・早稲田大学日台稲門会
会長 岩永康久
幹事一同

弔 辞 (弔電)

ご尊父様のご逝去の報に接し、心よりお悔やみ申し上げます。
簡燦雲様は早稲田大学の先輩であり、私達が台湾に勤務していた時は大変お世話になりました。
早稲田大学校友会の発展に多大なご指導をいただき、また、日本と台湾との友好・交流促進にも常に高配を賜りましたことを感謝申し上げます。
また、日台稲門会の年次会報には毎年貴社の広告を掲載していただき、日本でもお世話になっておりました。長年のご指導に深く深く感謝申し上げますと共に、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

合掌

経済用語解説(岩永会長記事に關し)

TPP Trans-Pacific Strategic Economic Partnership Agreement または単に Trans-Pacific Partnership (環太平洋戦略的経済連携協定、環太平洋パートナーシップ協定) 安倍首相は「聖域なき関税撤廃が前提でないことが明確になった」として事実上のTPP参加を表明した。

FTA Free Trade Agreement (自由貿易協定) 物品の関税、その他の制限的な通商規則、サービス貿易等の障壁など、通商上の障壁を取り除く自由貿易地域の結成を目的とした、二国間以上の国際協定。

EPA 経済連携協定 (Economic Partnership Agreement) 自由貿易協定 (FTA) を柱として、関税撤廃などの通商上の障壁の除去だけでなく、締約国間での経済取引の円滑化、経済制度の調和、および、サービス・投資・電子商取引などのさまざまな経済領域での連携強化・協力の促進なども含めた条約。

ECPA Economic Cooperation Framework Agreement (两岸経済協力枠組協議(海峡兩岸經濟合作架構協議)) 台湾と中国間のFTA。

RCEP Regional Comprehensive Economic Partnership (東アジア地域包括的経済連携) 東南アジア諸国連合加盟十ヶ国に、日本、中国、韓国、印度、オーストラリア、ニュージーランドの六ヶ国を含めた計十六ヶ国でFTAを進める構想。

〈年会費のお支払いについて〉

平成二十五年度年会費につきましては、左記口座にお振込みいただきますようお願いいたします。

●銀行振り込みの場合

- 三井住友銀行(銀行コード00009) 上大岡支店(店番566)
- 口座番号: 普通預金6929095
- 口座名義: 日台稲門会 川村淳一 (二キタイトウモンカイカワムラジュンイチ)

●郵便局振り込みの場合

加入者名: 日台稲門会

口座番号: 00130869805

*銀行または郵便局の払込金受領書をもって領収書に代えさせていただきます。当会発行の領収書がご入用の場合は、振込取扱票の通信欄にその旨ご記入ください。



編集後記

偶然というものは不思議なものである。高座日台交流の会の石川公弘会長が大和市議会議員長の折に元台湾少年工と遭遇しなければ(その前に市長が留守でなければ)留日七〇周年歓迎大会はなかったかも知れないし、また李登輝氏が総統にならなければ老少年工も堂々と高座会を結成できなかったかも知れない。また、編集子にしても台湾転勤の発令が下らなければ、一生台湾との縁故はなかったと思うし、殖民地から見た近代史に向き合うこともなかった。

明治維新以降を総て否定する史観がある。しかし、明治維新がなければ日清戦争もなく、台湾割譲もなかったろうが、逆に日本が列強の植民地になっただけで可能性は高かった。西列強がグローバルであるということは大航海時代とは異なり、今も残っているという気がする。

決して上から目線ではなく、台湾の歴史、文化に触れると、日本の国家としての道程が見えてくる。だが戦後日本アイデンティティは何となく曖昧になってきていて、自信のないこと夥しい。憲法議論でも前文のあり方がバラバラ、校友の元首相は「相手の嫌がる事はしない」と言ったが、何を意図して期待しての発言か、今では全く分からない。

ともあれ、コリアンタウンはあってもタイワンタウンがないのはなぜかと、深く考える今日この頃である。(編集子 齋藤)

WASEDA U 2013

祝・日台稲門会会報第16号発行

<p>早稲田大学校友会 日台稲門会 幹事 北川原宣夫 E-mail: kitagawarajp@yhb.ne.jp</p>	<p>日台稲門会 幹事 神田正治 E-mail: kanda03866@star.ocn.ne.jp</p>	<p>株式会社大和総研 総務部 次長 川村淳一 〒108-8505 東京都江東区冬木一五十六 電話:03(56220)5000(直通) E-mail:junichi.kawamura@dir.co.jp</p>	<p>小野間恒夫 神奈川県茅ヶ崎市南湖五一五五 電話:FA40467(883)2611</p>	<p>早稲田大学オープン教育センター講師 早稲田大学台湾研究所招聘研究員 岩永康久 〒103-8505 東京都新宿区早稲田鶴巻町五三一 早稲田大学研究開発センター2F 早稲田大学 電話:03(5222)6106(内線)20010</p>
<p>日台稲門会 幹事長 高橋徹 E-mail: torutaka20@hotmail.com</p>	<p>アジアンブリッジ株式会社 代表取締役社長 阪根嘉苗 〒141-0021 東京都品川区上大崎 1-1-10(三)四-四九〇八 E-mail:sakane@asian-bridge.com</p>	<p>日台稲門会・稲門乗馬会 齋藤晃 東京都新宿区新宿六二二五十五 E-mail:akira_sj@hotmail.com</p>	<p>東京都目黒区 目黒本町二一九一七 電話:FA403(3710)1669 携帯:080(1137)4447 E-mail:kn.koshishi@wing.ocn.ne.jp</p>	<p>日台稲門会 幹事 北村友雄 〒231-0023 横浜市中区山下町九八番地 GSHIM山下町 五一六 電話:045(988)7606 E-mail:kamuratomoo@comhome.ne.jp</p>
<p>真鍋藤正 事務所 高座日台交流の会 副会長 日台稲門会 監査役 真鍋藤正 神奈川県大和市中央五十二一五 電話:046(294)3090</p>	<p>日台稲門会 幹事 萩原伸一 E-mail: shin_hagiwarata0@yahoo.co.jp</p>	<p>日台稲門会 幹事 中島淳 税理士事務所 中島淳 渋谷区代々木二二二二一五 カテリーナ代々木二〇一 E-mail:taxnakajima@gmail.com</p>	<p>日台稲門会 幹事 寺田修 E-mail: osamu.tera989@gmail.com</p>	<p>フランスス・インター・リミテッド 陳惠珍 〒145-0013 東京都中野区弥生町 二一三十一一八 蒼苑ビル http://www.msfrances.com E-mail:chen@msfrances.com</p>
<p>早稲田大学台湾研究所 〒162-0041 東京都新宿区早稲田鶴巻町五三一 早稲田大学研究開発センター201号館(01号室) 電話:03(5222)2062(内線)0010 FA403(32200)0000 E-mail:xxchian@waseda.jp</p>	<p>日台稲門会 幹事 渡邊義典 〒204-0021 東京都清瀬市 元町二二二六二二五 E-mail: watanabe.yoshinori3@mbr.nifty.com</p>	<p>早稲田大学校友会 日台稲門会 渡邊光治 千葉県市川市福栄四一七七七 電話:047(396)2196</p>	<p>華隆機器工廠有限公司 董事長 廖朝欽 廠址 台中市豐原市圓環北路二段三五九號 電話:04(522)30000</p>	<p>社会福祉法人 丸紅基金 事務局 局長 三村達 〒100-8888 東京都千代田区大手町 一丁目四番二号 丸紅ビル十二階 電話:03(3282)7591 http://marubeni.or.jp</p>